

次回展のご案内



梅津庸一展 ポリネーター

会期:

2021年9月16日(木) - 2022年1月16日(日)

休館日:月曜日(9/20、1/10は開館)、12/31-1/3 開館時間:11時より19時まで

入館料:大人 1,200円 / 学生(25歳以下)1,000円 / ペア割引:大人2人 1,800円 / 学生2人 1,400円

主催/会場: **ワタリウム美術館** 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6 Tel:03-3402-3001
Email: official@watarium.co.jp <http://www.watarium.co.jp>

協力: 浦野むつみ、舛居、田中優次(株式会社 釉陶)、大塚オーミ陶業株式会社

作品に宿った梅津個人の想像力や無意識は多くの人を巻き込み、
巻き込まれながら不揃いで不気味な秩序をワタリウム美術館につくりあげる。

花粉を媒介する梅津自身の中にも複数の花粉が降っている。

WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art



近年の現代アーティストの中で、梅津庸一ほどその活動全域を把握しづらい作家はいない。細密画のようなドローイングや点描画のような絵画作品、自身を素材としたパフォーマンスを記録した映像作品、陶芸作品から、キュレーション、非営利ギャラリー運営など、その領域は多岐にわたっている。本展は2004年から2021年までの作品を梅津自身がキュレーションしていくが、回顧展ではない。

タイトルにある「ポリネーター」は植物の花粉を運んで受粉させる媒介者という意味をもち、梅津自身の立ち位置をたとえて選んだ言葉だ。繊細でフラジイルなものということで、アートと花粉は似ているかもしれない。それを世界中に広げていく。実際この2年、私たちの世界は微細なウイルスによって麻痺状態に追い込まれ、新たな扉を開かざるを得ない状況に来ていることを考えれば、花粉のようなアートが世界を席卷しても決しておかしくはない。



戯れ 2005
紙にインク、25.6×18.2cm

実は、ワタリウム美術館も「花粉」との縁が深い。1990年開催の第一回展「ライトシード」では、ゲスト・キュレーター、ハラルド・ゼーマンが目の覚めるような黄色のたんぽぽの花粉(ヴォルフガング・ライプの作品)を真新しいワタリウム美術館のフロアに敷き詰めた。日本の現代美術にとってそれは衝撃的な出来事だった。また翌年1991年の「ヨーゼフ・ボイス展 国境を超えユーラシアへ」では、ボイスの「ポーレントランスポート 1981」というアクションを展示した。ボイスは自身の作品を自分で運転するトラックに乗せて運び、ポーランドのウッジ美術館に寄贈した。第二次大戦中この「ポーレントランスポート」というドイツ語がポーランドへの輸送=死の道を連想させたが、ボイスはそのあってはならない歴史に〈再生〉の行動を加えた。この「ポーレン」と言うドイツ語には「ポーランド」と言う意味と同時に隔たりを超え軽やかに運ばれていく

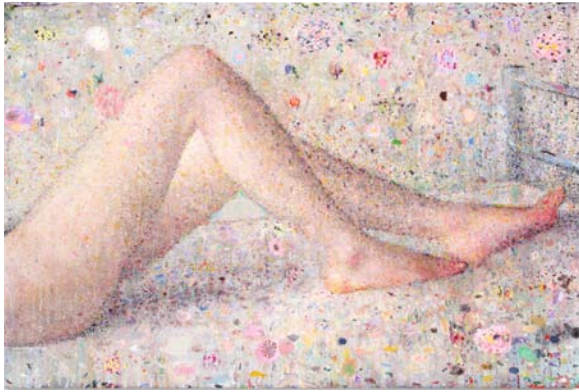
「花粉(ポーレン)」が掛けられていた。



梅津は言う、「美術とはなにか。そして芸術の有用性や公共性とはなにか。それはわかりやすい希望やとっつきやすいビジョンの提示にあるのではなく、一見すると有用性や公共性など感じられないほど入り組んだ悪い夢のような世界にこそ存在する」と語っている。いつも梅津の作品は悪い夢のようであり、とてもロマンチックなポエムのような空間を有している。本展ではさらに次のステージへと移り、楽しみな未知の空間となるはずだ。

霞ヶ浦航空飛行基地 2006
板に真鍮筆 90.5×60.5cm
高橋龍太郎コレクション所蔵
撮影：木奥恵三

展示予定作品より



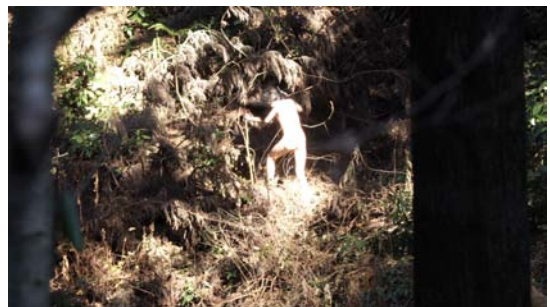
Spring leg 2005-2007
板、綿布、油彩、60.3×90.2cm 高橋龍太郎コレクション所蔵



不詳(小さな王国) 2018
板に水彩、アクリル、油彩、インク、22.1×14.1cm
個人蔵



フロリアル - 汚い光に混じった大きな花粉 - 2012-2014
パネルに油彩、ミクストメディア、111.7×191.2cm
愛知県美術館所蔵 Photo by Ichiro Mishima



高尾山にジャムを塗る、セカンドオピニオン 2018
ビデオ、4min 27sec



不詳 2017
板に墨、水彩、アクリル、インク、油彩、18.0×18.0×cm



密室 2019-2020
陶、17.0×19.7×10.5cm 個人蔵

展示予定作品数： 絵画作品 約100点 / 陶芸作品 約200点 / 映像作品 3点



信楽での作陶の様子 2021

梅津は、1年前から陶芸にも取り組んでおり、今年の5月からは日本六古窯のひとつに数えられる信楽に滞在し作陶している。梅津はやきものの街である信楽を、作家や職人、現代アート、愛好家、量産品や建材を手がける窯業の関係者、販売メーカー、材料工学の研究者にいたるまで生活と産業と芸術がリンクする結節点と捉えている。この見方は「表現者は街に潜伏している。それはあなたのことであり、わたしのことでもある。」展や「フル・フロンタル」展の問題意識と連続性を持っている。また、梅津の陶作品は美術史を参照し、自身を抑圧しながら制作する絵画作品とは異なり、作家が本来持っている造形の語彙がストレートに表出しているこ

とが特徴といえる。本展でも展示される陶作品は、梅津の初期作品に通じるあやしい雰囲気や宿しており、その点も興味深い。それはもしかすると、信楽でワンルームのアパートを仮住まいとした生活が、出身地である山形から上京した頃の初期衝動を梅津に思い出させているのかもしれない。

また梅津は口バート・ラウシェンバーグが1982年に信楽に長期滞在し大塚オーミ陶業株式会社との協働で大型の陶板作品を制作していることに注目し、ラウシェンバーグの「コンパイン・ペインティング」や信楽滞在での経験を起点に32枚の陶板作品を大塚オーミ陶業で制作した。ちなみに支持体には建材用の陶板が使用された。本展においてこの陶板作品は陶芸と絵画、そして産業と芸術とを結びつける重要な役割を担うだろう。



内なるスタジオ 2021
陶板、60×90 cm
撮影：今村裕司



ボトルメールシップ 2021
陶、20.5×26×12 cm
撮影：今村裕司

梅津庸一 Yoichi Umetsu (美術家・パーブルーム主宰)

1982年山形県生まれ、相模原在住。

主な個展に、08年「POST GRADUATION」ARATANIURANO。17年「未遂の花粉」愛知県美術館。21年「平成の気分」現代美術 舩居。主な展覧会に17年「恋せよ乙女!パーブルーム大学と梅津庸一の構想画」ワタリウム美術館。18年「パーブルタウンでパープリズム」パーブルーム予備校ほか。19年「百年の編み手たち 一流動する日本の近現代美術」東京都現代美術館。20年「梅津庸一キュレーション フル・フロンタル 裸のサーキュレーター」三越コンテンポラリーギャラリー。21年「平成美術：うたかたと瓦礫デブリ 1989-2019」京都市京セラ美術館。21年「絵画の見かた reprise」√K Contemporary など多数。



作品集に『ラムからマトン』(アートダイバー)。美術手帖 特集「絵画の見かた」(2020年12月号)監修。

ラファエル・コランの代表作《フロレアル》を自らの裸像に置き換えた《フロレアル(わたし)》(2004-07年)や、同じく自身がモデルとなり、黒田清輝の《智・感・情》(1897-1900年)を4枚の絵画で構成した《智・感・情・A》(2014年)など日本の近代洋画の黎明期の作品を自らに憑依させた自画像をはじめとする絵画作品などで知られる。そのほか自身のパフォーマンスを記録した映像作品、ドローイング、陶芸、自宅で20歳代のメンバー複数人と共に制作/生活を営む私塾「パーブルーム予備校」(2014年-)の運営、自身が主宰するパーブルームギャラリーの運営と企画、テキストの執筆など活動は多岐にわたる。一貫して美術が生起する地点に関心を持ち、作品の内側とそれを取り巻く制度やインフラの両面からアプローチしている。